

# フェスタサマーミュージーザ

## KAWASAKI 2020

ミュージーザ川崎シンフォニーホール

サマーミュージーザは全公演ライブ配信を実施しております。客席内と舞台上に映像収録カメラが入りますので、予めご了承ください。

### 東京交響楽団 オープニングコンサート

Tokyo Symphony Orchestra Opening Concert

ベートーヴェン生誕250年 信頼関係の厚い、マエストロ&amp;東響の「英雄」

7/23

木・祝

## ● プレトーク

14:20~14:40

話=辻 敏

(東京交響楽団事務局長)

※本公演と同じお席でお楽しみください。

## ● 開演

15:00

## ● 終演予定

17:00

## 曲目

三澤 慶:「音楽のまちのファンファーレ」  
~フェスタ サマーミュージーザ KAWASAKIに寄せて

(2分)

Kei Misawa: Fanfare for City of Music-to Festa Summer MUZA KAWASAKI

ストラヴィンスキー:八調の交響曲

(30分)

Stravinsky: Symphony in C major

第1楽章 モデラート・アラ・ブレーバ

第2楽章 ラルゲット・コンチェルト

第3楽章 アレグレット

第4楽章 ラルゴー テンポ・ジュスト、アラ・ブレーバ

※前半は指揮者なしで演奏いたします。

—休憩(20分)—

ベートーヴェン:交響曲第3番 変ホ長調 作品55「英雄」

(50分)

Beethoven: Symphony No. 3 in E-flat major, Op. 55, "Eroica"

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ

第2楽章 葬送行進曲:アダージョ・アッサイ

第3楽章 スケルツォ:アレグロ・ヴィヴァーチェ

第4楽章 フィナーレ:アレグロ・モルト

※演奏時間は目安です。

## 出演

指揮: ジョナサン・ノット(音楽監督) ※ベートーヴェンのみ、収録映像にて出演

コンサートマスター: グレブ・ニキティン(コンサートマスター)

※出演者・公演内容につきましては変更が生じる場合がございます。

## ■ 出演者プロフィール



©M.Okubo

指揮: ジョナサン・ノット Jonathan Nott, Conductor

イギリス生まれ。フランクフルトとヴィースバーデンの歌劇場で指揮者としてのキャリアをスタートし、ルツェルン交響楽団首席指揮者兼ルツェルン劇場音楽監督、アンサンブル・アンテルコンタンポラン音楽監督、ドイツ・バンベルク交響楽団首席指揮者を経て、2017年よりスイス・ロマン管弦楽団の音楽監督を務める。その抜群のプログラミング・センスに加え、古典から現代曲まで幅広いレパートリーを誇り、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、コンセルトヘボウ管、シカゴ響等のオーケストラ、ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭、BBCプロムス等の音楽祭へ客演している。東京交響楽団へは2011年10月定期演奏会でデビューし、翌2012年10月には次期音楽監督の就任を発表。2014年度より東京交響楽団第3代音楽監督を務める。2020年には、第32回「ミュージック・ペンクラブ音楽賞(オペラ・オーケストラ部門)」を、東京交響楽団とともに受賞。レコーディング活動においても多彩な才能を発揮しており、ウィーン・フィルやベルリン・フィルとの録音のほか、東京交響楽団とは8つのCDをリリースし、高い評価を得ている。

## ■ オーケストラ・プロフィール

東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra

【創設】

1946年創立。2004年より川崎市のフランチャイズ・オーケストラ。

【指揮者】

ジョナサン・ノット(音楽監督)、原田慶太楼(正指揮者 ※2021年4月より)、  
秋山和慶、ユベール・スダーン(以上、桂冠指揮者)、大友直人(名誉客演指揮者)、  
飯森範親(特別客演指揮者)、アルヴィド・ヤンソンス、上田仁、遠山信二(以上、永久名誉指揮者)

【楽団員数】

86名

【ホーム・コンサート・ホール】

ミュージーザ川崎シンフォニーホール、サントリーホール、東京オペラシティコンサートホール、  
新潟市民芸術文化会館、オリンパスホール八王子

【楽団ウェブサイト】

http://tokyosymphony.jp



Jonathan Nott, Music Director



●感動をもう一度!アーカイブ配信で  
本日の演奏をお楽しみいただけます。 1公演 1,000円  
配信期間:公演翌日12:00~8/31(月)23:59

https://tiget.net/tours/summermuza2020/

●アンコール曲 ●ほほ日刊サマーミュージーザ ONLINE!  
●アンケート ●パートナーショップ特典  
はこちらの特設サイトより



https://www.kawasaki-sym-hall.jp/festa/

ミュージーザ川崎シンフォニーホール ホールスポンサー ミュージーザ川崎シンフォニーホールの公演事業は、ホールスポンサーの皆様によって支えられています。

法人	個人	個人	個人
【特別賛助会員】	有限会社エムシーエス・デザインズ	セレス川崎農業協同組合	齊藤 隆徳
NTTアドバンステクノロジー株式会社	神奈川臨海鉄道株式会社	高橋昌也税理士・FP事務所	山下 啓史
川崎幸病院	川崎アゼリア株式会社	株式会社デイ・シー	佐藤 亨
川崎信用金庫	公益社団法人川崎市医師会	株式会社東芝	佐藤 晴茂
川崎フロンターレ	川崎市信用保証協会	株式会社 東芝	市橋信一郎
キャンノ株式会社	公益社団法人川崎市病院協会	東洋口ザイ株式会社	鈴木 徹
サントリーホールディングス株式会社	一般社団法人川崎市薬剤師会	日本薬機株式会社	関口 浩・三代子
大本山川崎大師平間寺	川崎鶴見臨港バス株式会社	びあ株式会社	高橋 美子
三井不動産グループ	川崎日航ホテル	富士電機株式会社	竹内 啓介
株式会社ヨドバシカメラ	かわさきファーズ株式会社	ホテルメトロポリタン川崎	都築 豊
	川崎臨港倉庫埠頭株式会社	株式会社ムーブエイト	中村紀美子
	株式会社きんでん	小笠原 将	西山 英昭
	株式会社ケイエスピー	小野 洋彰	橋本あみ子
	ケイジーケイ株式会社	金山 直樹	長谷川喜代江
	京浜楽器株式会社	喜多 絃一	林 直人
	株式会社さいか屋 川崎店	久住 映子	平野 信子
	公益財団法人JFE21世紀財団	小菅みつほ	廣瀬 治昇
	株式会社シグマコミュニケーションズ	後藤 実	前田 泉
		小林 知子	松本 武巳
			山内 利夫
			敬称略五十音順

(2020年7月1日現在)

## △ 新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、ご協力をお願いいたします。

## 【お客様へのお願い】

※マスク着用、手指消毒にご協力ください。

※終演後は、スタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いている扉から混雑を避けてお帰り下さい。

※出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。

※万一、クラスター(感染集団)の発生が明らかになった際、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

## 【館内設備について】

※クローク、ドリンクコーナー、ショップの営業はございません。

※冷水器の使用は停止しております。

※換気のため、通常よりも空調を強めております。また、隣席を空けているため、普段よりも寒く感じる場合がございます。(ブランケットの貸し出しは中止しております)

※アンコール曲は公演後、当ホールホームページに掲載いたします。

## ご登録をお願いします

神奈川県 LINE コロナお知らせシステム

会場内に掲示しているQRコードを読み取ってください。  
新型コロナに感染された方が発生した際、保健所の調査  
上必要と判断された場合にLINEメッセージが届きます。

※来場日ごとに、QRコードの読み取りをお願いします。

## ホール内は小さな音でもよく響きますので、ご協力をお願いいたします



演奏中の入退場はご遠慮ください。



全席指定の公演です。ご自分のお席でお聴きください。



ホール内客席では携帯電話、スマートフォンなど全ての電子機器の電源をお切りください。タブレット端末など光を発する機器も、周囲の方の鑑賞の妨げとなりますので、ご使用にならないようお願いいたします。



時計のアラーム・時報などは設定の解除をお願いいたします。



許可のない写真撮影、録音、録画は固くお断りいたします。



鈴のついたアクセサリー、お手荷物などは演奏中に音が出ないように、十分ご注意ください。また、アメの包み紙を開ける音にもご注意ください。



ホール内での飲食はご遠慮ください。



※曲が終わったとき、音が消えゆく余韻を十分に味わってから、拍手をお送りください。

【補聴器をお使いの皆さまへ】  
補聴器が正しく装着されていることをご確認くださいませよう、お願いいたします。

主催: 川崎市、ミュージーザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)  
後援: 川崎市教育委員会、公益社団法人日本オーケストラ連盟、J-WAVE 81.3FM、OTTAVA  
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)|独立行政法人日本芸術文化振興会  
映像・音響制作: YouClassics  
協力: 株式会社東京MDE、エヌ・ティ・ティ・スマートコネクト株式会社



# 3つの作品で味わう新時代への息吹き

## 混乱の時代から希望のある未来への響きを！

### ●音楽祭のオープニングを飾るおなじみのファンファーレ

三澤 慶:「音楽のまちのファンファーレ」  
～フェスタ サマーミュージア KAWASAKIに寄せて

2009年、ミュージア川崎シンフォニーホールの開館5周年および「フェスタ サマーミュージア KAWASAKI」の5周年を祝って三澤慶（1970～）が作曲した「音楽のまちのファンファーレ～フェスタ サマーミュージア KAWASAKIに寄せて」。同年の「フェスタ～」初日である2009年7月26日に「歓喜の広場」で、ユベール・スダーン指揮による東京交響楽団プラス・セクションにより初演され、以降は毎年「フェスタ～」の華やかなオープニングを飾るマストアイテムとなった。

曲は「トランペットが主体となった、ミュージア川崎の誕生日（7月1日）のモチーフ」「トロンボーンがリードする、街の活気を表現した〈喧噪〉のモチーフ」「チューバとティンパニによる、工業都市・川崎を表現した〈胎動〉のモチーフ」「ホルンの響きがベッドタウンとして発展する川崎を表現した〈豊かな暮らし〉のモチーフ」が渾然一体となり、未来へ向かうような力強さを聴かせてくれる。

### ●20世紀の中盤に生まれた知的な交響曲

ストラヴィンスキー:ハ調の交響曲

1940年11月、アメリカの名門オーケストラであるシカゴ交響楽団の創立50周年（1941年）を祝って初演された「ハ調の交響曲」は、イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）にとって、何度かあった人生の激動期のひとつ（1938～1940年）に作曲されている。作曲の期間中に娘、最初の妻、そして母を相次いで亡くし失意の中へ。しかも世界は第2次世界大戦へと確実に進んでいる混乱期であり、彼はやむなくヨーロッパからアメリカへと移住した。

ストラヴィンスキーは1910年代に有名な三大バレエ音楽（「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」）で頭角を現したが、その後は作品を発表する中で作風を変化させ、「新古典主義」と呼ばれるバロック音楽～古典派音楽の作曲手法を取り入れた音楽も発表。この「ハ調の交響曲」でもそうした手法を駆使しながら、知的な構成によって新時代の交響曲を創造している。

曲は4楽章構成。やや複雑化したソナタ形式による第1楽章は、可愛らしい第1主題と常に推進しているようなリズムが特徴。瞑想風の第2楽章は三部形式であり、やや小規模の編成によって演奏される。休みなく活気を帯びて演奏される第3楽章は目まぐるしく拍子に変化するスケルツォ。第4楽章はミステリアスな雰囲気が始まるが、躍動的な主部に入ると弦楽器によって主要主題が提示され、さらには第1楽章の主題群も加わって、軽快さと力強さを兼ね備えながら進んでいく。

### ●英雄ナポレオンがインスピレーションを与えた交響曲

ベートーヴェン:交響曲第3番「英雄」

19世紀が幕を開けて新時代への希望が花開くはずだったヨーロッパ諸国だったが、

一方ではナポレオン・ボナパルトというカリスマ的な軍人が政権を握っていたフランスを警戒。オーストリア（神聖ローマ帝国）もフランスの軍隊に圧倒されており、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が暮らすウィーンも時期はフランス軍の占領下に置かれた。

ベートーヴェンは当初、フランス革命後のスローガンとなった「自由、平等、友愛」の精神に共感し、リーダーであったナポレオンを賛美するべく、1803年には彼に献呈を予定した「ボナパルト」という新作交響曲を作曲。しかしその献呈は、ナポレオンが権力の象徴である皇帝という座に就くと取り消され、題名も「ある英雄のための交響曲」に変えて1804年に完成している。曲は1805年4月にウィーンのアン・デア・ウィーン劇場において公開初演された。

曲は全4楽章であり、ベートーヴェンが影響を受けたハイドンやモーツァルトの交響曲、さらには自身の交響曲第1番、第2番と比べて格段の進化が見える大作だ。大規模な第1楽章、葬送曲というスタイルでドラマを描く第2楽章、3本のホルンが力強い響きを作り上げる第3楽章、そして変奏曲という（交響曲としては）挑戦的なスタイルを採用した第4楽章（主題に採用したのは自身のバレエ音楽「プロメテウスの創造物」からのメロディ）。構成・形式のみならずオーケストレーションや転調など、新しい世紀の交響曲を宣言したような力作だといえるだろう。

## ■ベートーヴェンを描いた画家

『交響曲第3番「英雄」』を作曲していた1803年。

32歳のベートーヴェンは、ある画家の訪問を受けました。

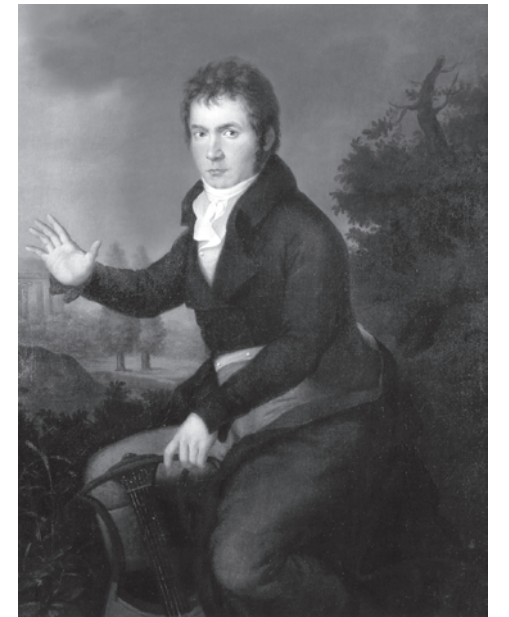
特別企画！  
かげはら史帆の  
ベートーヴェンコラム  
Vol. 1

画家の名はヴィリブロート・ヨーゼフ・メラー。当時ウィーンに来たばかりの20代の青年でした。友人プロイニングからの紹介を受けてメラーに会ったベートーヴェンは、気さくに彼を出迎え、ピアノで「新しい交響曲」——つまり当時書いていた交響曲第3番の終楽章と、2時間にもおおよぶ即興演奏を披露したそうです。

そのときの感激を絵筆で表現したかったのでしょうか。翌年から翌々年にかけて、メラーは1枚の肖像画を手がけます。いわゆる胸から上の肖像ではなくほぼ全身が描かれている大作で、画家の気合がうかがえます。しかしこの絵には1点、大きな謎があります。彼が左手で触れている楽器——リラ（竖琴型の楽器）なのです。メラーが聴いたのはピアノの演奏のはず。それなのに、なぜピアノではなくリラを描いたのでしょうか？

ベートーヴェンに古代の楽器をあえて持たせ、神聖なイメージを与えたかったのだろう——今日ではそのような見解が主流となっています。よくみると、上げられた右手の奥にはアポロンの神殿も見えます。作曲家としては人気が出始めたばかりの1803年。しかしこの頃からもう、ベートーヴェンを神聖化する動きは始まっていたのです。

（かげはら史帆/ライター）



メラーによるベートーヴェンの肖像画